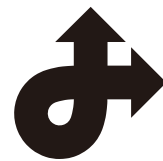


新制作

SHINSEISAKU



Vol.71 / 2016

夏号

新制作協会 広報誌

80th



80回記念展に添えて

新制作協会は、今年2016年で創立80周年を迎えます。1936年に20代の若き画家達9名で、創立されました。(猪熊弦一郎、伊勢正義、脇田和、中西利雄、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、鈴木誠) この新制作の伝統を受け継ぎながら、私達は未来を目指して、新制作メンバー全員で、80周年の記念展を盛り上げてまいりたいと存じます。現在、新制作協会は、絵画、彫刻、スペースデザインの三部で成り立っています。この三部が気

持ちを一つにして、充実した空間を皆様にお見せ致します。

公募美術団体展は、我が国の美術界の特徴の一つでもあります。今回、80回続いて来た新制作の節目には、緊張感と活気があります。

私達は、権威を持たない純粋で公平な自由を追求して来ました。創立の精神を忘れず、現在の社会文化の形成をわきまえて、絵画、彫刻、スペースデザインの三部合同の展示を致します。



委員長
さの
佐野 ぬい

三部それぞれの特徴や、内容は十分楽しめます。一人ひとりの個性の主張も見応えがあります。一緒に仕事をなさりたいと思う方は、是非応募してください。作品をお待ちしています。

各部より

絵画部

屋嘉部 正人

いよいよ、新制作協会は80回記念展に向けての準備がスタートしました。先輩たちの足跡を振り返るとともに、本会の理念の象徴「向上と進歩」を表すマークに恥じぬように、新しい会を再構築する節目の年ともいえます。

80回記念展のスローガンは「新たな可能性に…」です。まず、出品規定が変わります。多くの団体展が作品のサイズをより小さく制限する中で、新制作展は時代に逆行するかのように応募作品のサイズを300cmまでと広げました。「大きい作品が選ばれやすい」ということが無いように、審査の際に3つのカテゴリーに分けて審査を行います。「小さくても良いものはイイ!」という確かな眼を持って審査に臨みます。本会の理念とスローガンにふさわしい、より実験的で挑戦的な作品をお待ちしております。

●オープントーク(絵画展示室にて)&合同懇親会
9/14(水) 14:00～16:30(オープントーク)
18:00～20:00(合同懇親会)

会期初日に日本全国の会員や一般出品者が最も多く集まります。

会員と一般出品者が作品について語り合うチャンスです。皆様の積極的な参加をお待ちしております。

●ギャラリートーク / 絵画展示室

9/18(日) 14:00～17:00

●記念展特別企画として、「3部合同展示」「アーカイブス展示」「子ども・アート・しんせいさく」「グッズ販売」「チャリティー販売」などを行います。どうぞお楽しみください。

彫刻部

永津 守

今年は新制作80周年の年です。節目の年でもありますので、ここで新制作彫刻部の現在と過去とをデータにより比較してみたいと思います。現在私の手元にある中で最も古いデータは45回展(1981年)のもので、それと昨年79回展のデータとを比較した表を作りました。この間、多少の誤差はあるもののすべての項目にわたってほぼ漸減といってよい減り方をしていますが、ふたつ並べてみるとまるで別の展覧会のような感じです。

	45回展(1981年)	79回展(2015年)
搬入者数	214	79
搬入点数	444	109
入選者数	98	58
入選点数	99	61
選外点数	345	48

この数字を見ているとその落差によって雪崩に巻き込まれたような気持ちになります。ショックでこのあとこの原稿を3日間くらい書けなくなりました。萎える気持ちを奮い立たせていけば、しかし会員のパッションは変わっていないと思うのです。また79回展の受賞者の中には震災後の原発事故で周りを放射線量の高い地区に囲まれたアトリエで制作した方が2名いるなど、若手のエネルギーも昔と比べて落ちてはいないと思います。

厳しい状況の中、この変貌を時代のせいにするのではなく改革と対社会的な活動によって充実した展覧会にしたいと思っています。

●オープニングトークは初日9月14日(水)の15:00～16:30、彫刻展示室にて行います。ギャラリートークは9月18日(日)の14:00～同じく彫刻展示室です。チャリティー・作品販売・ポストカード販売に関してはほぼ例年の通り実施します。

スペースデザイン部

田中 遵

新制作スペースデザイン部(以下SD部)は、「空間＝スペース」におけるあらゆるデザイン作品(実物、実験的作品、写真、模型等)の制作活動を行っています。

作品は床置き、壁付け、宙吊り、ミニチュールなどがあり、展示空間として照度をおさえた空間、自然の光や風を感じる野外空間などもあります。

今年は80回記念展を迎え、より一層充実した魅力ある会場づくりを目指しております。さまざまな作品表現とその空間をご覧ください。

●レクチャー

9/17(土) 15:00～16:30、3F研修室

SD部会員が作品とデザインについてお話をいたします。

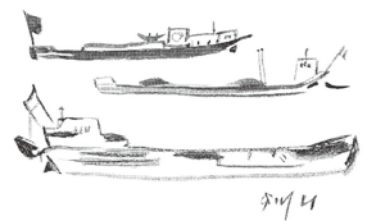
●フリートーク

9/17(土) 17:00～、SD部展示会場

会員や出品者、また観覧者が自由に話し合える時間です。

●チャリティーグッズの販売

会員によるスペースキューブ、会員・受賞作品の写真はがきを会場で販売いたします。収益金は「あしなが育英会」を通じ「東日本大震災津波遺児募金」に寄付いたします。SD部はこれからも創作活動を通して被災された方々を応援いたします。



80回記念展企画

絵画部 小島 隆三

新制作マークの意味ご存知ですか？このマークは創立会員の猪熊弦一郎氏、脇田和氏により考案され、矢印は「向上と進歩」を意味します。この精神を元に80回を歩んできたわけです。しかし、その精神を引き継ぎながらも80年という長い年月の中で、創立当時の勢いを保つことはとても難しいことです。時代の変貌と様々な表現の多様性に公募団体がその受け皿になっていけるのか大変難しい時期に来ていると思います。公募展は美術表現の発表と若手作家の育成の場として戦前戦後の時期に数多く立ち上がりました。プロのアーティストを目指す若者の挑戦の場でもありました。しかし現在に至っては新制作に限らずどの公募団体もその役目を果たしているか甚だ疑問なのは私

だけではないと思います。これからの公募展のあり方を真摯に考えていかなければならない時期に来ていると思います。その中で80回を迎える新制作展は新たな可能性にチャレンジしていく挑戦者として出発の年としていきたいと思っています。

80回展企画として、改めて80回という歴史を振り返る場として初期審査・展示風景そして初期図録・ポスターなどのアーカイブス展示を予定しています。

そして今回のテーマ“新たな可能性に…”では展示スペースの一角を使い、これからの新制作を担っていく若手作家を中心にジャンルを超え絵画・彫刻・スペースデザインの合同展示、作品を前にして作家の本音を語るトークショーも企画しています。3部から成る新制作ならではの空

間アートの場になることでしょう。また、昨年好評を得ました子どもたちを対象にした紙コップでのインスタレーション「子ども・アート・しんせいさく」も予定しております。

第80回記念新制作展は決して派手なイベントはありませんが今までにない展覧会のあり方また、次世代に繋げていく第一歩として「向上と進歩」の精神を引き継ぎながら記憶に残る展覧会にしたいと思いますのでご期待ください。



第3回新制作協会展 図録表紙

2016年度協会新代表委員

[代表委員会]

委員長 佐野 ぬい (絵画部)
副委員長 石松 豊秋 (彫刻部)
" 中野 威 (SD部)

代表委員 ● 絵画部

藤田 邦統、眞野 真理子、
屋嘉部 正人、山口 都

● 彫刻部

加藤 裕之、永津 守
増井 岳人、吉村 維元

● SD部

岡本 泰子、田中 遵、野口 育郎
若松 美佐子



代表委員

[合同委員会]

- 会計委員会 ● 図録委員会 (図録/広告)
- 美術館担当委員会
- 広報委員会 (広報・PR/会報/HP)
- IT委員会 ● 受賞作家展委員会
- 慶弔委員会 ● 美術団体懇話会
- 80回記念展委員会 ● 会計監査

新制作展に初めて応募される方、すでに作品応募の準備をされておられる方へ…

作品公募制ですので、質の高い優秀な応募作品を期待し、貴作品による発言の場を設けています。

公募情報は、美術関係誌広告、協会発行の公募ポスター・リーフレット・応募規定、公式ホームページをご覧ください。

応募のお申込みとお問い合わせは

- Tel / 03-6233-7008
- Fax / 03-6233-7009
- E-mail / webmaster@shinseisaku.net
- 公式HP / http://www.shinseisaku.net/

新制作協会

〒160-0022
東京都新宿区新宿6丁目28番10号
大阪屋ビル202号



※新作家賞受賞者には、賞牌として彫刻部会員・菅戸千津子氏の作品が授与されます。また、80回記念賞受賞者には、賞牌として絵画部会員・佐野ぬい氏の作品が授与されます。

第80回記念 新制作展

9.14 (水) — 9.26 (月)

10:00 ~ 18:00 (入場 17:30 まで)

[開催時間等は変更の場合あり。開催状況の確認は、国立新美術館HP・ハローダイヤル(03-5777-8600)で]

国立新美術館

入場料 一般：800円 (学生・65歳以上無料)

休館日 9/20 (火)

金曜日 20:00 終了 (入場 19:30 まで)

最終日 9/26 (月) 14:00 終了 (入場 13:00 まで)

Information

巡回展開催日程

- ◆ 京都展
京都市美術館
10/11(火)~10/23(木) 休館日10/17(月)
- ◆ 名古屋展
愛知県芸術文化センター8Fギャラリー
11/22(火)~11/27(日) 休館日なし
- ◆ 広島展
広島県立美術館・県民ギャラリー
12/6(火)~12/11(日) 休館日なし

受賞作家展 - 新制作協会賞および新作家賞の副賞として企画される受賞者の新作展覧会です -

絵画

銀座 井上画廊

1/18 MON - 1/23 SAT

新作家賞受賞者

- 小川 あぐり
- 奥山 久美子
- 近藤 弘子
- 桜岡 みゆき
- 塩田 志津子
- 高野 真木子
- 滝田 一雄
- 田中 直子
- 豊澤 めぐみ
- 柳 千代子
- 渡辺 有葵



小川 あぐり
揺A`16 50S(斜)



塩田 志津子
めくるめく歳月-蓮池 100F



奥山 久美子
植物の時間 100F



柳 千代子
ある日のこと 100F



高野 真木子
いのちの音を聴く1 100F



滝田 一雄
室内風景(麗) 100F



田中 直子
森の入り口 100F



渡辺 有葵
そして祭りが生まれる 100F



近藤 弘子
LIFT IT UP 1 100F



豊澤 めぐみ
ホロスコープ 100F



桜岡 みゆき
揺るぐ空 80S

彫刻

ギャラリーせいほう

2/8 MON - 2/19 FRI

新作家賞受賞者

- 大野 良一 ■ 高野 正晃
- 小口 偉 ■ 広瀬 護
- 香取 宏幸 ■ 松枝 源太郎
- 小柳 順

79 ⇒ 80 回新制作展彫刻部シード作家：
小柳 順、松枝 源太郎



小口 偉
PUT 2 樟、メタセコイヤ



広瀬 護
犬 木屑、合成樹脂、紙



大野 良一
藤の鞘 乾漆



香取 宏幸
月は昏れていく 樺



松枝 源太郎
首像 石膏



小柳 順
Libre 樺



高野 正晃
この空の下にいる2 FRP

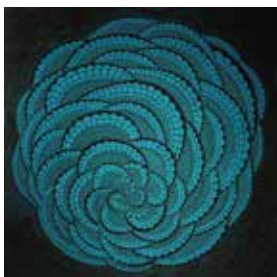
SD

建築会館ギャラリー

2/8 MON - 2/13 SAT

新作家賞受賞者

- 新出 こずえ子 ■ 柳田 真理子
- 中曽根 清子 ■ 横尾 まさこ



中曽根 清子
花II 105x105x4cm



横尾 まさこ
Matrix II 114x30x30cm



柳田 真理子
こころの音II 40x180x180cm



新出 こずえ子
ぬげら 各 100x50x50cm

新刊 下

小磯先生の思い出 スケッチ

絵画部会員 佐藤 泰生

小磯良平、林武、山口薫、牛島憲之、脇田和。私が東京芸大に入った時の教授陣には日本洋画界の大輪ともいべき人たちが名前を連ねていた。当時の日本の美術状況はポップアートや抽象表現主義が流行しだして、抽象画が全盛であり、オブジェを扱う作家が現れ始めた頃である。学内では人物中心の授業で基礎を学ぶゆっくりとした時間が流れていたように思う。

私は4年の時に小磯教室に入った。当時の規則では3年次から専門の教室に入り4年で卒業制作をするのが普通だったが、前代未聞、一年在籍していた山口教室から友人二人（奥村、酒井）と小磯教室に編入したのだ。当時の山口教室はものすごく人気があって殆どの学生が押し寄せ授業はすし詰め状態だった。いろいろな理由があったのだが、山口先生には大変失礼なことをしたと思っている。こんなわけで以降、大学院から助手と5年間小磯先生のそばで勉強することになり、この時期の体験がその後の私に大きな影響を与えたとと思っている。

学生の頃の私は他の仲間同様ほとんどスケッチはやらなかった。デッサンの意味も分からず、格好だけつけていたのかもしれない。皆、人物画ばかりで普段に手を動かすことは希で、まして風景スケッチなどやらなかった。小磯教室に入ってから同じだったのはデッサンの達人の先生のそばにいたためだろうか。先生のデッサンの線はすごい。どこからあの豊かで強くシャープな線が出てくるのか、不思議なような奇跡のような、そして当たり前のような気持ちにさせられたものだ。

大学院の頃から友人たちと神戸の御影の先生のお宅に伺うようになった。絵の話、ゴルフの話など、珍しい画集を拝見しながら楽しいひと時を過ごし、帰り際に必ず少しだけと言ってアトリエを見せていただいた。描きかけの油絵やパ

ステルなど、清澄で緊張感のあるアトリエの雰囲気全部が小磯先生の作品のようだった。何度目かで気づいたのだが、アトリエのドア付近にわら半紙のようなもののビルディングがそこそこに乱立していて、よく見るとデッサンが山積みされているのだ。毎日描くモデルのデッサンか、油絵のエスキースか、それとも挿絵の下絵だろうか、とにかくその量の多さにびっくりしたのを覚えている。

小磯先生の助手をしている時、学生に付き添って私も先生と一緒に奈良の古美術研究旅行に行ったことがあった。ある晩、寮での食事のあと、先生の部屋で助手たちとウイスキーの水割りなど飲みながらダートゲームをしてくろいでいたときのことである。負けん気の強い先生がゲームの点数にこだわってムキになられていたのはおかしかったが、何を思われたのか「佐藤くん、そこに立って」と言われ、昼間買った半紙と鉛筆を取られた。何分ぐらいたったのか4、5分か10分かあまり長くはなかった。サラサラとスケッチをされ「はい」と言われてその紙を下された。ヒッピーのような長い髪の毛、シャツの袖をまくってポケットに手を突っ込み、少し俯いたポーズに「1970、R・KOISO」とサインが入っている。それは感動の時間だった。薄い鉛筆とアクセントとしての濃い鉛筆の調子がリズムミカルな音楽のように描かれていて、典雅なモデリングがなされていた。そのスケッチは宝物として今も私のアトリエに掛かっている。

その旅行で法隆寺や東大寺、聖林寺など楽しく見学していた時のことだ。小磯先生と一緒にということだろうか、学生たちもこの時とばかりに懸命に写生をしていた。私にしてみれば妙な照れもあってスケッチなどできる感じではなかった。ところがである。滅多に強要しない先生から「佐藤くんもスケッチしたら」と言われて

しまったのである。嫌だというわけには行かない。師弟の関係では描くのは当然のことであった。早速私は学生達に混じって仏像を描き始めた。何年か振りのスケッチで手が滑ってうまくいかない。先生に見ていただくと、「いいじゃない」と軽い調子で一言言われたきりであった。デッサンはいいか悪いかであり、当然ながらなにか指導の言葉を期待していたので、かえってこの一言は応えた。絵がどうのこうのというのではなく、簡単なスケッチでも描く意味のあることを教えてくださったのだろうか、この何気ない言葉は今でも胸の奥に残っている。

なりふり構わずスケッチを始めたのはそれから随分と時間が流れた後だ。毎日自転車に乗り、スケッチブックと水彩の道具を積んで、住んでいる逗子の風景を探して廻った。海や山、樹木や小川などスケッチをした。東京に出るときは色鉛筆と小さなスケッチブックを鞆にいれ、街路や公園、また居酒屋でもバーでもこれほど思うと手を動かすようになった。絵のモチーフがイメージの人物画からサーカスや風景に広がり始めた頃だ。

昭和63年小磯先生は亡くなられた。12月16日のお通夜の晩、私は先生のデスマスクを描いた。寒い夜だった。ガタガタ震えながら一生懸命描いた。私はたくさんの人からいろいろな影響を受けてきたが、最も大きな影響を受けた師の一人は小磯先生である。先生の人間性はもちろん毎日描くこと、勉強すること、そして一本の線にかける気持を大事にし、少しでも前に進めたらと思っている。



2015・ボリビア国際彫刻シンポジウムに参加して

彫刻部会員 永津 守

昨年の10月8日から15日まで南米ボリビアの東部にあるサンタクルス市で開催された国際彫刻シンポジウムに参加してきました。2006年に第1回が行われて以降隔年ごとに開催され、昨年で第5回目となっています。過去、新制作からは第2回に川村兼章さん、第3回に池田雅彦さん、第4回にはSD部の立花克樹さんが招待され、参加しています。最初に参加された川村さんが翌年の新制作展にシンポジウムの実施者であるボリビア人彫刻家ホアン・プスティジョス氏を招待し、シンポジウムの写真を会場展示したことを覚えておられる方も多いと思います。川村さんがホアンを招待したくなった気持ちには私も全く同感で、これ程のことが彫刻家に出来るのだという彼の並外れた企画力に圧倒されたからです。このことを中心に書きたいと思います。

通常、シンポジウムは討論という意味ですので、彫刻シンポジウムという彫刻の話をすると思われかもしれませんが。まあ話であるには違いないのですが、今回集まった彫刻家の国はドイツ、ロシア、モンテネグロ、チリ、アルゼンチン、ボリビア、日本の8カ国です。話をするには言葉の壁があって大変ですが、彫刻シンポジウムに通訳はいりません。彫刻という便利な共通言語があるからです。彫刻シンポジウムでは作品を作ります。このシンポジウムは木彫で、原木を人数分(10人)会場に置き、1週間で仕上げるといいます。木は大きく、直径1m長さ3mというもザラなのですがこれをなんとか期間中に完成させます。

完成した作品を見て、あるいは途中で意見を言い合うのですが(英語とポディランゲージで)、これが驚くほどの確で深く理解し合えるのです。地球の反対側の国で育った初めて会う者同士で、言語・宗教・歴史・教育が異なる彫刻家同士が分かり合えるということは彫刻にはそれら

を超えた普遍性があるということでしょう。

さてシンポジウムの運営ですが、優れた点を簡条書きにします。

- ① 会場は『マンサーナウノ』、日本語でいえば『第一区画』で、国際空港もある程の市の中心広場です。ここで朝から晩までエンジンチェーンソーの爆音を響かせるのですが、日本の銀座でそんなことが出来るかどうか。
- ② 中心部ですから当然人も多く、写真のように一人ずつ設けられたテントが動物園のオリ状態で、見物されます。テレビや新聞の取材インタビューも多く、それを見た人たちが一緒に写真を撮ってくれとか、現地の日本人の人がテレビを見たからといって話しかけてきました。私は有名人だそうです。



シンポジウム会場と見物人

- ③ 宿泊は、五つ星のホテルでした。ここに10人分×1週間分の部屋が用意されたのですが、メンバーの話によるとホアンが自分の作品をこのホテルに預け、その代償として無償で提供されたとのことでした。
- ④ 食事は朝はホテル、昼と夜は毎日違ったレストランに連れて行ってもらいました。これも自分で払うのは追加のワイン代くらいで全部無料です。事務局がお金を出したところとホアンのつながりで無償になったところがあったようです。
- ⑤ このシンポジウムで助かったのは作家一人一人に南米の若手彫刻家を助手としてつけてくれたことでした。作家は国際公募で選ばれるので

すが、助手も公募選考で技術を確認して選んだようです。シンポジウムの終了後彼らは日本領事館が主催する2日間のワークショップで私のへたくそな講義を受けました。皆とても真剣で怖かったです。

⑥ ワークショップの場所はホアンの自宅兼アトリエで、目測でおよそ1000坪ありました(100坪の間違いではない)。ホアンの奥様(日本人)の話では彼は早く両親を亡くして決して豊かではなかったようですが、土地は自分で手に入れたそうです。中に自宅と大小の工房があり、木彫・石彫・金属・鋳物の仕事が出来ようになっていました。これらの建物は全部自分で作ったと言っていたのですが、これだけの広さがなければいろいろな技法が出来ないということに日本へ帰ってきて(自分の貧弱なアトリエを見てから)気がつきました。

⑦ お金の話が多くて恐縮ですが、食住が無償でチェーンソーやそのガソリン代なども向こう持ち、その上報酬が一人1000ドルです。助手に関しても作家に準じてお金がかかっているでしょう。これらの費用はスポンサーから提供されたものが多いようです。ポスターやバナーにいろいろな企業のロゴが入っていました。

以上、ボリビアシンポジウムに行っても感じたことですが、ホアンのマネジメント力のすごさが少しでも伝えられたでしょうか。スポンサーやマスコミなど周りの人を動かすには勿論利害関係もあるでしょうが、ホアンがシンポジウムを利己心ではなく無私の心でやっていることが相手に伝わっているからだと思います。私がこれで反省してホアンのようにやれと言われても、無理!というしかないのですが、作家というものは社会的な活動をしなければ社会の中に存在を認められないのだということは分かりました。なんとか少しでも出来ることからやって行きたいと思います。

訃報 (平成28年3月末現在) 新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

吉田 昇
絵画部会員



平成27年10月30日逝去
(享年87才)

清水 良治
彫刻部会員



平成28年2月24日逝去
(享年80才)

熊谷 英雄
絵画部会員



平成28年3月2日逝去
(享年74才)

公募団体ベストセレクション

Best Selection 2016

5月4日(水)～5月27日(金)

会場：東京都美術館

この度、「公募団体ベストセレクション美術2016展」に出品させていただくことになり大変光栄に思っています。出品する「零形15-1」は、永年取り組んでいる零シリーズのひとつです。「零形」は見えない形、解説不能な形、不完全で何か足りない形を意味する造語ですが、それらは豊かなイメージと可能性を与えてくれるように思えてなりません。今から十数年前、亡くなった人からいただいた手紙を画面に貼り付けたのがきっかけで、友人や知人、ギャラリーなどから送られてくる展覧会の案内状やチラシも使うようになりました。個人情報と著作権が問題となっている昨今、それらに抵触しないように解体と再構築を繰り返し作品制作しています。「芸術終焉論」が出て久しい現在、芸術の自己超越と可能性を信じながら、正しい距離で絵画と向き合っていきたいと考えています。

絵画部会員 木嶋正吾

出品作家

- 木嶋 正吾 「零形 15-1」
樺山 祐和 「森にうつるもうひとつの森へ-地霊-」
高堀 正俊 「食卓」
渡辺 有葵 「入れないのなら想像の翼で」
増井 岳人 「僕が王様」
木方 立樹 「playground」
大野 良一 「門椿」
杉田 文哉 「ゆらぎ 2015 - WALL II -」



《伝言板》

● 図録のバックナンバーについて
引き続き寄贈可能な号がありましたら、皆様ぜひご協力をお願いいたします。

● 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館は今年開館25周年を迎えます。それを記念し、3月30日～4月5日まで三越日本橋本店にて『猪熊弦一郎と「華ひらく」展』が開催されました。

● 10月22日～12月18日の期間、故・鈴木武右衛門氏の回顧展が開催されます。
「PASSIONE -鈴木武右衛門展-」
会期：2016年10月22日(土)～12月18日(日)
会場：長泉院付属現代彫刻美術館
東京都目黒区中目黒 4-12-18
Tel. 03-3792-5858



訃報

第75回記念展でトークショーをして頂きました南郷宏さんは2016年1月10日ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。



編集後記

古い図録に猪熊弦一郎先生の印象的な文章がありましたので、以下原文の抜粋を載せました。

「形の発見」

形を写す事が出来る画家は沢山いるが、形を作り得る画家は本当に数える程しか居ない。形を写す画家は形の持つ真の美を知ろうとしない。

こうした画家は心の問題を大切そうに言いふらして、むしろ形を軽視し、形の美など知ろうともしないで鼻の先で笑って来て居る。結局形の解からない画家は心の方に逃げて行くものだ。

日本の画家はもつと形の美を追求し、認識しなければいけない。(中略)形を創るには常識はむしろ敵である。

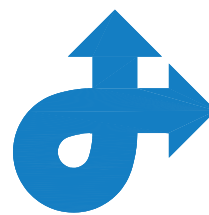
そして余程の勇気が要る。(中略)

秩序、それは形の美を知り、感じ、統御し得るヴァランスを感じ得る、とぎすまされた智性である。

不思議な形、恐ろしい形、幸せな形、強い形、弱々しい形、安定する形、動く形、愉快な形、重い形、軽い形、種々あるが、これ等の持つ各々の美しさを感じ得る頭、それは選ばれた人々へのみ与えられる。

意味のない形の美を知る事は尚、むつかしい。形の美に敏感な画家は画を作る事を知っている。形の美を知る画家はたえず画面を改造し、発見する。これには非常なる勇気と思ひ切りが必要だ。計画通りの、軌道を進む画家には形の発見が少ない。形を知る画家は心をも作り得る画家である。(千葉)

今号表紙の絵は、猪熊先生の「自由の住む都市」です。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館にご協力頂き実現いたしました。他にも大勢の方々のご尽力もあって、今号が発行できました事を深く感謝申し上げます。また今後の広報誌に關しまして、係では会員の皆様の投稿を広く募集しております。誌面の都合上、すべての原稿を載せる事はできないのですが、執筆テーマをお持ちの方は、是非新制作事務局までお知らせください。これからも、より充実した広報誌作りに取り組んで参ります。(宇多)



新制作協会

〒160-0022

東京都新宿区新宿 6-28-10 大阪屋ビル202

Tel: 03-6233-7008 Fax: 03-6233-7009

URL: <http://www.shinseisaku.net/>

E-mail: webmaster@shinseisaku.net

発行 / 新制作協会

企画・編集・制作 / 広報委員会広報誌編集委員

千葉 文隆、関水 英司、田中 直子、

岩間 弘、宇多 花織、中野 威

監修 / 佐野 めい

発行日 / 2016年5月

表紙絵 / 猪熊 弦一郎 「自由の住む都市」 1980年

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館所蔵

@The MIMOCA Foundation

* 広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務局迄ご連絡ください。